

鹿児島大学総合研究博物館年報
Annual Report of The Kagoshima University Museum

No. 2

2002

鹿児島大学総合研究博物館
The Kagoshima University Museum

鹿児島大学総合研究博物館年報
Annual Report of The Kagoshima University Museum
No. 2

2002



鹿児島大学総合研究博物館
The Kagoshima University Museum



鹿児島高等農林学校 養蚕関係資料

年報 No.2 目次

1	総合研究博物館の2年目ー現状と課題ー	大塚裕之	1
2	総合研究博物館の組織 運営委員 兼務教官 学外協力研究者	大木公彦・福元しげ子	1
3	総合研究博物館規則等	大木公彦	4
4	専門委員会	大木公彦	8
5	2002年度の主な活動	橋本達也	8
6	2002度の活動報告		
	1. 研究交流会「氷河期以降の始良カルデラ」	大木公彦	10
	「アジアの中の近世陶磁器ーやきものからみた 江戸時代の対外交流と薩摩焼ー」	橋本達也	
	2. 市民講座「かごしまの海」	大木公彦	11
	「地球からのめぐみー金ー」		
	3. 公開講座		
	(1) 自然体験ツアー「なぎさの自然」	大木公彦	12
	(2) 大学博物館への誘い「昆虫標本のできるまで ープロの目・プロの技ー」	落合雪野	13
	4. 特別展 「地球からのめぐみー金ー」	大木公彦	14
	特別展アンケート結果	福元しげ子	15
	5. 生命科学学術講演会 「発酵と伝統食品」	内木場哲也	19
	6. ワークショップ 「エコツーリズム ー生態資源からの視点ー」	落合雪野	20
	7. その他の活動		
	(1) 植物標本室	落合雪野	21
	(2) ミニコンサート 「金の音色・銀の音色」	大木公彦	22
	(3) 高倉復元完成式典	橋本達也	23
	(4) 生涯学習県民フェア	内木場哲也	23
	8. パンフレットの作成	橋本達也	24
	9. ボランティア活動	内木場哲也	24
7	総合研究博物館に所蔵された標本類	大木公彦 内木場哲也 橋本達也	25
8	地球科学分野を中心とする学術標本の登録と管理	桑山 龍	28
9	博物館見学記	福元しげ子	29
10	2002年度 特別展ポスター		31

1 総合研究博物館の2年目－現状と課題－

鹿児島大学総合研究博物館長 大塚 裕之

設置から2年目を迎えた平成14年度の鹿児島大学総合研究博物館は、2つの系（資料研究系・分析研究系）の専任教官5名に、研究支援推進員1名、パート職員1名を加えた計7名の陣容が揃い、種々の博物館活動をさらに軌道に乗せるべく努力をいたしました。

大学博物館活動の柱の一つである普及活動の一環として、平成14年度には、身近な南九州を題材にした特別展、市民講座、公開講座、研究交流会等の諸行事を実施いたしました。10月～11月に実施した特別展では、本館所蔵の「浦島コレクション」を基に、南部九州の代表的な地下資源である金鉱石をテーマとして、日本の金鉱石を展示いたしました。郷土を代表する世界的資源を初めてご覧になる学内外の参観者が多く、大変好評をいただきました。この特別展では、地元の多くの関連企業や有志の方々の協力を賜り開催することができました。また、鹿児島県の中央に位置する「鹿児島湾－始良カルデラの歴史」と同湾や東南アジアの「なぎさの環境」を課題にした研究交流会と公開講座では、身近な自然と地球環境問題を取り上げました。

このような活動の反面、現在、鹿児島大学の各学部の研究室には、総計130万点を超える学術標本類や資料が所蔵されていますが、それらを収蔵する建物や収蔵室が皆無に近い状況にあり、その一部しか整理や保存作業等が進行していません。学術標本・資料の一元的な収蔵・整理・保存・収集および研究など、大学博物館としての使命を果たすためにも、これらの収蔵室の確保は急務であります。2年目もその環境は改善されませんでした。このような状況を早急に打開するためには、この年報の創刊号でも申しましたように、博物館の建物の建設に向けて、今後も一層努力していく必要があります。建物建設のすぐの実現が困難であれば、大学附設の博物館としての最低限の義務を果たせるスペースを学内的に確保することが急務であります。

一方、博物館の定員配置を見ますと、現在は創設時の2系（資料研究系・分析研究系）で、しかも、分析研究系は不完全な助教授のみの配置です。これは平成14年までに全国に設置された8つの国立大学博物館としては最小の規模で、広範囲にわたる博物館活動を行っていくには、設置前に構想した「情報展示系」のような部門を実現する必要があります。鹿児島大学総合研究博物館が名実ともに大学の「知」の結集したセンターとして発展するために、皆様方の一層の御理解と御支援をお願い申し上げます。

2 総合研究博物館の組織

館長 大塚 裕之 教授 理学部 古生物学

研究部

資料研究系	大木 公彦 教授	地質学
	橋本 達也 助教授	考古学
	福元しげ子 助手	博物館資料学
分析研究系	内木場哲也 助教授	生化学
	落合 雪野 助教授	民族植物学
研究支援推進員	桑山 龍	

一般事務 坂元 理恵
事務局 総務部研究協力課

運営委員（総合研究博物館専任教官を除く）

法文学部	新田 栄治	教授	教育学部	八田 明夫	教授
理学部	山根 正気	教授	医学部	平川 忠敏	教授
歯学部	長岡 英一	教授	工学部	高橋 武重	教授
農学部	櫛下町鉦敏	教授	水産学部	鈴木 廣志	教授

兼務教官

地球科学分野

森脇 広	：法文学部	（自然風景の変化に関する研究）
鈴木 達郎	：教育学部	（地質年代学）
松井 智彰	：教育学部	（斜長石巨晶の鉱物学的研究）
八田 明夫	：教育学部	（理科教育、有孔虫の研究）
富田 克利	：理学部	（粘土鉱物の研究）
井村 隆介	：理学部	（活断層と活火山の活動史・災害研究）
小林 哲夫	：理学部	（火山地質、噴火現象、テフロクロノロジー）
櫻井 仁人	：工学部	（黒潮流軸変動）
西 隆一郎	：工学部	（海岸地形学）
河野 元治	：農学部	（鹿児島県の地質と鉱物）
日高 正康	：水産学部	（海底表層堆積物および底層流）

生物学分野

久保田康裕	：教育学部	（植物群集の動態と多様性の維持機構）
鈴木 英治	：理学部	（暖温帯から熱帯にかけての植物多様性の研究）
宮本 句子	：理学部	（陸上植物の多様性の解析）
相場慎一郎	：理学部	（多雨林の樹木種多様性）
一谷 勝之	：農学部	（作物の遺伝的多様性）
馬田 英隆	：農学部	（九州産キノコ類の収集と展示）
野田 伸一	：多島研	（医学的昆虫・ダニ類の分布）
河合 溪	：多島研	（南西諸島海産無脊椎動物の種分化）
塚原 潤三	：理学部	（海産無脊椎動物の生殖と発生）
山根 正気	：理学部	（東南アジア産剣膜翅類の分類と生物地理）
富山 清升	：理学部	（軟体動物貝類）
中西 良孝	：農学部	（在来家畜および野生化動物の保護と活用に関する研究）
小澤 貴和	：水産学部	（魚類仔稚魚の研究、サイウオ科魚類の分類学的研究）
四宮 明彦	：水産学部	（魚類の分類生態学の研究）
鈴木 廣志	：水産学部	（大型十脚甲殻類の分類と生態）

考古学・歴史学・民俗学分野

新田 栄治：法文学部（東南アジア考古学）

本田 道輝	：法文学部	(九州と南西諸島の文化交流の研究)
渡辺 芳郎	：法文学部	(薩摩焼の考古学的研究)
中村 直子	：法文学部	(南部九州の弥生・古墳時代の研究)
新里 貴之	：法文学部	(琉球列島先史時代の考古学的研究)
原口 泉	：法文学部	(薩摩藩の博物学)
青山 亨	：多島研	(東南アジアの歴史的文献および映像資料の電子化とデータベース化)
土田 充義	：工学部	(アジアの民家)
藤枝 繁	：水産学部	(鹿児島県海岸漂着物に関する研究)

理学・教育学分野

米澤 弘夫	：理学部	(植物由来の酵素研究)
穴澤 活郎	：理学部	(非人為作用による水質形成機構の研究)
有馬 一成	：理学部	(タンパク質分解酵素アイソザイムの分子進化)
坂元 隼雄	：理学部	(環境試料中の微量元素含有量と分布)
富安 卓滋	：理学部	(環境中における水銀の挙動)
大西 佳子	：歯学部	(歯学関係の展示研究、サイエンス・コミュニケーション)
八木 史郎	：農学部	(植物・菌類のレクチンタンパク質の分布)
土田 理	：教育学部	(観察・実験場面における児童・生徒のグラフ認知過程、観察・実験活動へ児童・生徒同士のコミュニケーションが果たす役割)

学外協力研究者

秋元 和實	熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター助教授	(底生有孔虫類を用いた地質時代の海洋環境の復元)
石畑 清武	鹿児島大学名誉教授	(熱帯園芸学、熱帯果樹、植物、野菜類の導入、順化、生態、形態の研究評価とそれらの栽培および改良に関する研究)
浦島 幸世	鹿児島大学名誉教授	(地殻における元素の移動と濃集、たとえば熱水の溶存物質の移動と濃集による金属鉱床の研究)
太田 英利	琉球大学熱帯生物圏研究センター助教授	(爬虫両生類の系統・分類・生物地理・自然史・保全、特にアジア東部からオセアニア西部にかけての亜熱帯および熱帯域の島嶼における種分化、系統進化について研究)
金田 信	鹿児島大学名誉教授	(植物に含まれるタンパク質分解酵素、とくにセリン型酵素ククミシンの研究)
税所 俊郎	鹿児島大学名誉教授	(海洋生物学、水族生態学、水産動物学に関する研究)
鮫島 正道	第一幼児教育短期大学助教授	(動物形態学、鳥類骨格による比較形態学的研究、鹿児島県に分布する脊椎動物のフィールド調査による生態観察と分類・形態学的研究)
下山 正一	九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門生物圏進化学講座助手	(古生物学と地質学、軟体動物化石の系統分類と群集古生態の研究・生物起源堆積物の生成、運搬、拡散過程の理論的研究・新生代の地層区分と年代測定に関する地質学的研究・化石と地層を使った九州の地殻運動累積傾向の研究)
永富 昭	鹿児島大学名誉教授	(アブ垂目(昆虫綱：ハエ目)の分類に関する研究)

- 福田 晴夫 鹿児島県自然環境保全審議会委員（昆虫生態学、蝶類の生活史・日本蝶相の成立史、とくに南方からの移動種に関する研究）
- 堀田 満 鹿児島県立短期大学長・鹿児島大学名誉教授（植物系統分類・地理学、熱帯植物学、有用・民族植物学の研究）
- 三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部長（中世城郭史、日本荘園史、戦国史、南島史、文化財史の研究）
- 山下 智 鹿児島大学名誉教授（動物生理学とくに味覚・嗅覚の神経生理学を専門とし、化学感覚の神経情報の電気生理学的解析、および昆虫、魚類、両生類にわたる比較生理学の研究）
- 湯川 淳一 九州大学大学院農学研究院教授・九州大学総合研究博物館長・鹿児島大学名誉教授（タマバエ類の分類学的及び生態学的研究・昆虫と寄主植物の相互関係・地球温暖化が昆虫に及ぼす影響・インドネシア、クラカタウ諸島の生態遷移に関する研究）
- 行田 義三（貝類の分類学および生態学的研究）

3 総合研究博物館規則等

総合研究博物館規則等について本年度の制定および変更はなかった。

鹿児島大学総合研究博物館規則

（平成13年4月1日 制定）

（趣旨）

第1条 この規則は、鹿児島大学学則（平成9年4月1日制定）第9条第2項の規定に基づき、鹿児島大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（目的）

第2条 博物館は、鹿児島大学（以下「本学」という。）の学内共同教育研究施設として、本学の学術標本資料の収蔵、展示、公開及び学術標本資料に関する教育研究の支援を行うとともに、学内外の教育研究活動に寄与することを目的とする。

（業務）

第3条 博物館においては、次に掲げる業務を行う。

- (1) 学術標本資料の収集及びその利用に関すること。
- (2) 学術標本資料の解析及び学術評価に関すること。
- (3) 学術標本資料の情報化に関すること。
- (4) その他博物館の目的を達成するために必要なこと。

（研究部）

第4条 博物館に、研究部を置く。

2 研究部に、次の2系を置く。

資料研究系

分析研究系

（職員）

第5条 博物館に、次に掲げる職員を置く。

- (1) 博物館長
- (2) 専任教官
- (3) その他必要な職員

2 前項第2号及び第3号の職員は、博物館長の命を受け、博物館の業務に従事する。

(博物館長)

第6条 博物館長は、本学専任教授のうちから、第9条に定める管理委員会が推薦し、学長が選考する。

2 博物館長は、博物館の業務を掌理する。

3 博物館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

4 博物館長に欠員を生じた場合の補欠の博物館長の任期は、前任者の残任期間とする。

(兼務教官)

第7条 博物館に、兼務教官を置くことができる。

2 兼務教官は、所属部局長を経て申し出のあった者について、学長が兼務を命ずる。

3 兼務教官の任期は2年とし、再任を妨げない。

(協力研究者)

第8条 博物館に、学外の協力研究者を置くことができる。

2 協力研究者は、次条に定める管理委員会の議を経て、博物館長が委嘱する。

(重要事項の審議)

第9条 博物館の管理運営に関する重要事項については、鹿児島大学学内共同教育研究施設管理委員会（以下「管理委員会」という。）において審議する。

(運営委員会)

第10条 博物館に、鹿児島大学総合研究博物館運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会は、管理委員会が定める管理及び運営の基本方針に基づき、博物館の運営に関する具体的事項を審議する。

3 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 博物館長
- (2) 博物館の専任教官
- (3) 各学部の教授、助教授又は講師のうちから選出された者各1名

4 前項第3号に規定する委員は、それぞれの部局の長の推薦に基づき、学長が任命する。

5 第3項第3号に規定する委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

6 運営委員会に委員長を置き、博物館長をもって充てる。

7 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

8 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

9 運営委員会は、委員の過半数の出席により成立し、議事は出席委員の過半数により決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

10 運営委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第11条 運営委員会に、専門的事項を審議するため、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会に関し必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(事務)

第12条 博物館に関する事務は、総務部研究協力課において処理する。

(雑則)

第13条 この規則に定めるもののほか、博物館に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成13年4月1日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に任命される博物館長の選考については、第6条第1項の規定にかかわらず、鹿児島大学将来計画委員会総合研究博物館専門部会の推薦する者について、学長が行う。

鹿児島大学総合研究博物館学外協力研究者に関する申合せ (平成14年2月21日制定)

(趣旨)

- 1 鹿児島大学総合研究博物館規則第8条第1項の規定に基づき、鹿児島大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）の研究等の推進を図るため、学外協力研究者に関する必要事項について申し合わせる。

(申し込み)

- 2 学外協力研究者として、博物館において協力活動を行おうとする者は、所定の申込書（別紙様式第1号）により博物館長に提出するものとする。

(選考方法)

- 3 博物館長は、2により申し込みのあった者について、鹿児島大学総合研究博物館運営委員会（以下「運営委員会」という。）で選考し、鹿児島大学学内共同教育研究施設管理委員会に推薦するものとする。

(受入期間)

- 4 学外協力研究者の受入期間は、2年とし、再任は妨げない。

(給与及び経費)

- 5 学外協力研究者にかかる給与及び必要経費については、博物館は負担しない。

(協力内容)

- 6 学外協力研究者は、博物館の職員と連携し、博物館の標本の整理・保管、その標本に基づく研究等の推進のための協力を行うものとする。

(研究の公開)

- 7 学外協力研究者は、博物館の協力活動を通じて知り得た研究データ等を公開しようとする場合は、博物館長の承諾を得て行うものとする。

(活動中の事故)

- 8 学外協力研究者が活動中に不慮の事故を受けた場合は、それにかかる費用は本人が負担するものとする。

(その他)

- 9 この申合せに定めるもののほか、学外協力研究者に関する必要な事項は、運営委員会が別に定める。

附 則

- 1 この申合せは、平成14年2月21日から施行する。
- 2 この申合せ施行後、最初に委嘱される学外協力研究者の受入期間は、4の規定にかかわらず、

平成15年3月31日までとする。

鹿児島大学総合研究博物館専門委員会内規

(平成13年7月11日 制定)

(趣旨)

- 1 鹿児島大学総合研究博物館規則第11条2項の規定に基づき、専門委員会に関する必要事項を定める。

(専門委員会)

- 2 専門委員会に次の3つの委員会を置く。
 - 1) プロジェクト推進委員会
 - ・研究プロジェクトの企画・実施
 - ・研究プロジェクトの推進を支援するための活動
 - 2) 企画交流委員会
 - ・シンポジウム、研究会、公開講座等の企画及び実施
 - ・学外協力研究者の募集・登録及び協力研究者との情報交換
 - ・ボランティアの募集・登録及びボランティアとの情報交換
 - ・客員研究員の募集
 - 3) 出版広報委員会
 - ・ニュースレター、広報等の編集・刊行
 - ・モノグラフの編集・刊行
 - ・ホームページの編集・管理
 - ・その他博物館の行う出版広報活動

(委員長および委員)

- 3 兼務教官の中から館長・専任教官が各専門委員会の委員長を選出し、委員長および専任教官が各委員会3名、計9名の兼務教官を委員に推薦する。

(委員長および委員の任期)

- 4 各専門委員会の委員長および委員の任期は2年間とする。但し再任は妨げない。

(専任教官および館長)

- 5 専任教官はすべての委員会の委員として出席する。館長はすべての委員会に出席することができ、必要と考える時は、委員長に会議の開催を要請できる。

(兼務教官の参加)

- 6 各専門委員会委員長は、プロジェクト・企画交流・出版広報の各委員会にその分野に関係した兼務教官の参加を求めることができる。

(兼務教官の召集)

- 7 重要議題については、館長が兼務教官を召集し意見を聞くことができる。その場合、館長が議長となる。

附 則

- 1 この内規は、平成13年7月11日から施行する。
- 2 この内規施行後、実状に即して内規を変更することができる。
(3の規定：平成13年11月14日に行なわれた第5回運営委員会にて変更)

4 専門委員会

専門委員会は本年度から実質的な活動を開始したが、プロジェクト推進委員会は、博物館が設立されて2年目であることから本年度は会議を開くに至らなかった。

各専門委員会の委員の任期が2年であるため、今年度の委員の変更はない。

1) プロジェクト推進委員会

本年度、プロジェクト推進委員会は開催されなかった。

2) 企画交流委員会

- ・第1回企画交流委員会（前年度） 平成14年 3月 6日（水）
- ・第2回企画交流委員会 平成14年 11月 12日（火）
- ・第3回企画交流委員会 平成15年 3月 18日（火）

3) 出版広報委員会

- ・第1回出版広報委員会 平成14年 6月 5日（水）

専門委員会の委員長、委員は以下のとおりである（敬称略）。

1. プロジェクト推進委員会 委員長：青山 亨（多島研）
八田 明夫（教育）；塚原 潤三（理学）；鈴木 廣志（水産）
専任教官：内木場哲也
2. 企画交流委員会 委員長：渡辺 芳郎（法文）
山根 正氣（理学）；富安 卓滋（理学）；桜井 仁人（工学）
専任教官：大木 公彦・落合 雪野
3. 出版広報委員会 委員長：土田 理（教育）
井村 隆介（理学）；有馬 一成（理学）；藤枝 繁（水産）；新里 貴之（埋文）
専任教官：橋本 達也

5 2002年度の主な活動

5月17日（金）17：00～19：00

第1回 研究交流会

「氷期以後の始良カルデラ」

講師：下山 正一（九州大学大学院理学研究院）・森脇 広（鹿児島大学法文学部）

場所：鹿児島大学 郡元キャンパス 総合研究棟2F 201号教室

6月15日（土）

第2回 公開講座「大学博物館への誘い」10：00～16：00

昆虫標本のできるまで—プロの目・プロの技—

講師：山根正氣（理学部）

7月20日（土）

第1回 市民講座「かごしまの海」

「黒潮の話」 櫻井仁人（工学部）、「鹿児島湾の環境」 大木公彦（総合研究博物館）

7月27日（土）

公開講座「第2回 自然体験ツアー なぎさの自然」

案内者：佐藤正典氏（理学部）、塚原潤三氏（理学部）、西隆一郎氏（工学部）

10月24日（木）～11月26日（火）

特別展「地球からのめぐみー金ー」

会場：鹿児島大学 郡元キャンパス 総合研究棟2Fプレゼンテーションホール 入場無料

時間：9時30分～17時30分（期間中全日開催）

11月16日（土） 14:00～16:00

市民講座「地球からのめぐみー金ー」

講師：浦島幸世（鹿児島大学名誉教授）

場所：鹿児島大学 郡元キャンパス 総合研究棟2F 201号教室

11月16日（土） 13:00～14:00

ミニコンサート「金の音色・銀の音色」

フルート：池田博幸・新名主かおり・和田梨奈、チェロ：有村航平

12月3日（火） 14:00～15:00

第3回 生命科学学術講演会「発酵と伝統食品」

山元正昭（株式会社河内源一郎商店 代表取締役）

場所：理学部220号室

12月9日（月） 16:00～19:00

第2回 研究交流会

「アジアのなかの近世陶磁器ーやきものからみた江戸時代の対外交流と薩摩焼ー」

講師：大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館 副館長）・渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）

場所：鹿児島大学 郡元キャンパス 総合研究棟2F 201号教室

12月12日（木）

高倉復元完成式典

2月4日（火） 10:00～15:00

生涯学習県民フェア

大口市大口文化会館

3月10日（月） 13:30～16:00

ワークショップ「エコツーリズムー生態資源からの視点ー」

講師：山田 勇（京都大学東南アジア研究センター教授）

場所：鹿児島大学 郡元キャンパス 総合研究棟2F 201号教室

6 2002年度の活動報告

1. 研究交流会

研究交流会は、本年度から、さまざまな分野の研究テーマを設定し、可能な限り異なる専門の講師を招待してそのテーマに関する講演をお願いし、専門をこえた議論を深めることを目的として始めた。

第1回 「氷期以後の始良カルデラ」を5月17日（金）の17時より19時まで鹿児島大学総合教育研究棟201室で行なった。学内外から59名の参加者があった。

2名の講師と講演タイトルは次のとおりである。

1. 下山 正一（九州大学大学院理学研究院）

「新島（燃島）からみた始良カルデラの水塊環境の変遷」

2. 森脇 広（鹿児島大学法文学部）

「始良カルデラ北西岸の平野における後氷期の地形変化と地殻変動」

下山氏は古生物学の立場から、鹿児島湾奥部（始良カルデラ）に位置する新島の貝化石の群集解析や炭素同位体分析の結果を踏まえて、最終氷期以降の海水準変動と始良カルデラ内の水塊環境の変遷について最新の研究データを含めて講演した。

森脇氏は自然地理学の立場から、始良カルデラ北西岸の平野で得られた沖積層のボーリング試料、とくに沖積層に挟在する火山灰層と産出貝化石から、海水準変動とこの地域の地殻変動について講演した。



下山 正一氏



第1回 研究交流会

第2回 12月9日（月）16時より19時まで「アジアの中の近世陶磁器ーやきものからみた江戸時代の対外交流と薩摩焼ー」を郡元キャンパス総合教育研究棟201号室において開催した。

2名の講師と講演タイトルは次のとおりである。

1. 大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館 副館長）

「やきものからみた江戸時代の対外交流」

2. 渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）

「近世薩摩焼の窯構造」

近世陶磁器研究の第一人者、大橋氏には「やきものの」の技術からみた江戸時代の東アジアとの交流と交易品として東南アジアからヨーロッパまで運ばれたやきものからみた交流の歴史について講演いただいた。また渡辺氏には近年考古学的な調査が進みつつある薩摩焼の生産技術について窯の構造を中心として解説いただいた。



大橋 康二氏

第1回・第2回ともに終了後、総合討論が行われ、活発な質疑応答があった。その後に行われた講師を囲む懇親会でも、講演に関する質問が多く出され、盛況であった。

2. 市民講座

今年度から一般向けに市民講座を企画し、2回実施した。

第1回 第1回目となる市民講座を海の記念日にちなんで「かごしまの海」と題し、7月20日（土）の13時より16時まで鹿児島大学総合教育研究棟201室で開催した。学内外から43名の参加者があった。

2名の講師と講演タイトルは次のとおりである。

1. 櫻井仁人（鹿児島大学工学部）「黒潮の話」
2. 大木公彦（鹿児島大学総合研究博物館）

「鹿児島湾の環境」

はじめに櫻井氏が「黒潮の話」と題して、地球全体の海流における黒潮の位置付けや黒潮の特徴についてわかりやすく講演した。

続いて大木が「鹿児島湾の環境」と題して、鹿児島湾の地形・地質が世界的に類を見ない深い内湾であることや、海底堆積物と底生有孔虫群集から明らかになった水塊構造について講演した。それぞれの講演終了後に質問が多く出され活発な意見交換がなされた。



第1回市民講座 櫻井 仁人氏

第2回 「地球からのめぐみ一金一」を、同タイトルの第2回特別展の一環として、11月16日（土）の午後2時より4時半まで鹿児島大学総合教育研究棟201室で開催した。学内外から40名の参加者があった。

浦島幸世 鹿児島大学名誉教授（学外協力研究者）が金鉱床の成因や日本の金山、鹿児島の金山について、鉱床学のみならず金山の歴史を含めてわかりやすく講演した。ユーモアにあふれた話に参加者からたびたび笑い声があがり、鹿児島の菱刈鉱山の総産金量が日本



第2回市民講座 浦島 幸世氏

一で、現在、日本で生産される金のほとんどが鹿児島県産であることに驚きの声があがった。参加者の多くが特別展で実際の標本を見た直後に聞いたこともあり、好評であった。

3. 公開講座

(1) 自然体験ツアー「なぎさの自然」

第2回目となる自然体験ツアーは7月27日（土）を予定し、定員45名をはるかにこえる41家族92名の応募があった。応募者を抽選で45名に絞り、抽選にもれた方には郑重にお断りした。しかし、台風12号接近のために延期となり、8月10日（土）に実施した。当日9名のキャンセルがあり、35名が参加した。

自然体験ツアーは、溶岩海岸と干潟の生態系を比較するというコンセプトで、鹿児島大学の理学部生命化学科の塚原潤三氏、同学部地球環境科学科の佐藤正典氏、工学部海洋土木工学科の西隆一郎氏の案内で行われた。桜島の袴腰と重富海岸を訪れ、両海岸の生物相を比べたり、波の作用について説明を受けた。

終了後、帰りのバスの中で参加者全員がアンケートに答え、自然体験ツアーを年4回に、あるいは毎月公開・市民講座を開催して欲しいなどの意見が寄せられた。

自然体験ツアーの実施状況は下記のとおりである。

公開講座「自然体験ツアー なぎさの自然」

日 時：8月10日（土） 10：00～16：45

案内者：塚原潤三氏（理学部）、佐藤正典氏（理学部）、西隆一郎氏（工学部）

9：40 鹿児島大学中央図書館前に集合（貸切バス）

10：00～10：45 中央図書館前 → 桜島栈橋 → 袴腰着

10：45～12：00 「溶岩海岸の生態系」

12：00～12：30 袴腰発 → 桜島栈橋 → 多賀山着

12：30～13：30 多賀山（昼食）

13：30～14：10 多賀山発 → 重富海岸着

14：10～16：00 「重富海岸の干潟」

16：00～16：45 重富海岸発 → 鹿児島大学中央図書館着

16：50 解散

参加費（資料代・保険料・昼食代） 大人1,000円、子供500円



自然体験ツアー 桜島



自然体験ツアー 重富海岸

(2) 大学博物館への誘い「昆虫標本のできるまで—プロの目・プロの技—」

6月15日、第2回公開講座「大学博物館への誘い」「昆虫標本のできるまで—プロの目・プロの技—」を開催した。今回は山根正氣 鹿児島大学理学部教授を講師にむかえ、昆虫の分類と昆虫標本の作り方を解説していただいた。ここでは、その様子を紹介したい。

多数の応募者

5月上旬、関係諸機関や博物館行事参加者らに講座紹介の案内状を発送し、参加者を募ったところ、募集人数の20名を大幅に超える33名の方々からの応募があった。応募者は鹿児島市を中心に、吹上町、始良町、伊集院町、山川町などに在住の方々で、9才から67才までの幅広い世代が含まれていた。なかには締め切り日直前に講座のことで知り、博物館まで応募はがきを直接持参するという人もいた。5月30日に抽選をおこなった結果、小中学生10名、高校生1名、おとな9名の計20名の参加者が決定され、参加決定者には受講証と参加の手引きが、抽選にもれた人にはその旨を知らせる葉書がそれぞれ発送された。

講義を聞くだけでなく、実習に参加することが講座の大切なポイントであったため、講師の目が行き届く範囲や設備の都合を考えて、残念ながら今回は20名に参加者を制限せざるを得なかった。なお、参加できなかったの方々には、後日テキストを郵送した。

当日のながれ

講座当日は、講師の山根氏が主に解説と指導を担当したほか、影沢信彦氏（鹿児島大学大学院理工学研究科大学院生）がアシスタントとして参加し、講座全体をサポートした。

まず、午前9時に鹿児島大学郡元キャンパス総合教育研究棟201室に参加者が集合し、講座スケジュールの説明とテキストの配布を受けた。そのあと、参加者は植物園に移動し、およそ1時間にわたって昆虫採集をおこなった。そのなかで、植物園という比較的狭い場所にも数多くの昆虫がいることを実感し、驚く参加者も少なくなかった。

公開講座 山根正氣氏

10時30分頃ふたたび総合教育研究棟201室に戻った参加者は、山根氏が作成した21ページにわたるテキストにもとづき、講義を受けた。その内容は昆虫の分類に関する知識、昆虫採集をめぐる自然保護や生命倫理にかかわる問題といった基礎的なものから、昆虫標本を作る目的や意義、作り方の技術的なポイント、ラベルの重要性などの具体的なものまで広範囲におよんだ。また、影沢氏がハエを例に昆虫研究の様子を披露し、さらに昆虫の同定に役に立つ一般向け書籍を紹介するなど、参加者にとって親しみやすく、実用性の高い講義が展開された。

午後からは、参加者それ



公開講座 山根 正氣氏

それが採集した昆虫を用いて、標本を作成する実習がおこなわれた。講師による用具の説明や実演の後、参加者ひとりひとりが作成に挑戦した。なかには山根氏も驚くような種類の昆虫を持参したり、すばらしい展翅のテクニックを披露したりする小中学生もいて、会場はおおいに盛りあがった。また、見本として山根氏が作成した昆虫標本が公開され、そのすばらしさに感嘆する人たちも多かった。参加者と講師の熱意におされ、予定時間を1時間以上オーバーして、午後4時30分頃、講座は終了した。

講座を終えて

今回の公開講座の目的は、昆虫を採集し、標本を作製することが、昆虫そのものを研究するだけでなく、昆虫が生息する地域の自然環境やその変化を見つめるための重要な手段であること、さらには、そのためにどのような「プロの目・プロの技」を使って昆虫標本が作られているかを広く伝えようとするところにあった。実際に講師とともに昆虫を集め、自ら道具を使って標本を作る講座は、参加者にとって貴重な機会になったと思われる。準備段階から積極的にご協力いただき、専門的な内容をわかりやすく伝えていただいた山根、影沢両氏に感謝したい。

4. 特別展「地球からのめぐみ ― 金 ―」

第2回特別展は、浦島幸世 鹿児島大学名誉教授（学外協力研究者）が北海道大学・鹿児島大学在職中に採集した金鉱石を中心に展示を行った。

浦島氏の14000点にもおよぶ金を中心とした鉱石標本は、同氏の退官とともに学外で保管されていたが、鹿児島大学の総合研究博物館開設を機に当館へ寄贈いただいたものである。日本のほとんどの金鉱山が閉山した今、浦島氏の採集した標本は極めて貴重で、そのほとんどが二度と採集できないものである。

今回の特別展ではおよそ300点の標本を展示し、金鉱床と火山の関係、鹿児島県の金鉱床、日本の金鉱床、金とその他の鉱物、金鉱山の発見の歴史と作業、金製品などのコーナーを設けて、金をもっと身近に感じていただくように配慮した。

もっとも好評だった展示は、5m四方の台上に人工衛星からの撮影による日本列島図上に鉱山の位置を表示し、その位置から糸を引っ張り、その鉱山産出の金鉱石標本を結んで展示したものである。また、総産金量が5t以上の主要な23の金鉱山の位置には、総産金量を示す棒を立て、一目で産出量が比較できるように工夫した。さらに金鉱床の生成年代を大きく3つの時代に区分し、位置、棒、糸の色分けを行った。



第2回特別展 会場

さらに、触れる鉱石のコーナーと実験コーナーについても好評を得た。

この展示には、住友金属菱刈鉱山と三井金属串木野鉱山（ゴールドパーク串木野）から貴重な金鉱石を、島津興業尚古集成館から明治時代の山ヶ野鉱山の写真を借用することができた。

特別展は下記の要領で行い、会期中の入場者数は1402名であった。

第2回特別展「地球からのめぐみ—金—」

- 会 期： 2002年10月24日（木）～11月26日（火）（期間中全日開催）
会 場： 鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟 2F プレゼンテーションホール
開館時間： 9：30～17：30 〈入場無料〉
後 援： 鹿児島県立博物館、住友金属（株）菱刈鉱山、
（株）島津興業 尚古集成館、ゴールドパーク串木野

特別展アンケート結果

総合研究博物館では、アンケート用紙を用意し、任意で記入をお願いした。結果を以下に示す。
アンケート回答数：661名（入場者1402名のうち）

1、どこからこられましたか？

学内：266、学外／市内：302、学外／県内市外：54、県外：39
県外：北海道、群馬、茨木、栃木、東京、埼玉、神奈川、愛知、奈良、兵庫、福岡、大分、
長崎、熊本、宮崎、オランダ

2、ご感想はいかがでしたか？（重複回答あり）

おもしろかった：	330	(50%)
興味をもった：	336	(50%)
何とも思わなかった：	0	(0%)
つまらなかった：	0	(0%)
回答数	666	

3、いちばん印象に残ったものは何ですか

<肉眼で見る熱水鉱床の鉱物、その他の鉱物>

串木野のとじ金：砂金：蛍石：車骨鉄：硬石膏：紅石英：カオリナイト：モリブデンの鉱石：
鉄の結晶（生六面体）：シリカに変わったシアノバクテリア：海外の鉱物

<金の利用について>

金の名刺：金のフルーツ：魚卵状のオパール：金のインゴット：金が医薬品や携帯などに使わ
れているということ

<菱刈の地質鉱床>

地質鉱床断面図や鉱脈断面写真と岩石鉱石の展示

<岩戸の地質鉱床>

地質鉱床断面図や変成帯断面写真と岩石鉱石の展示

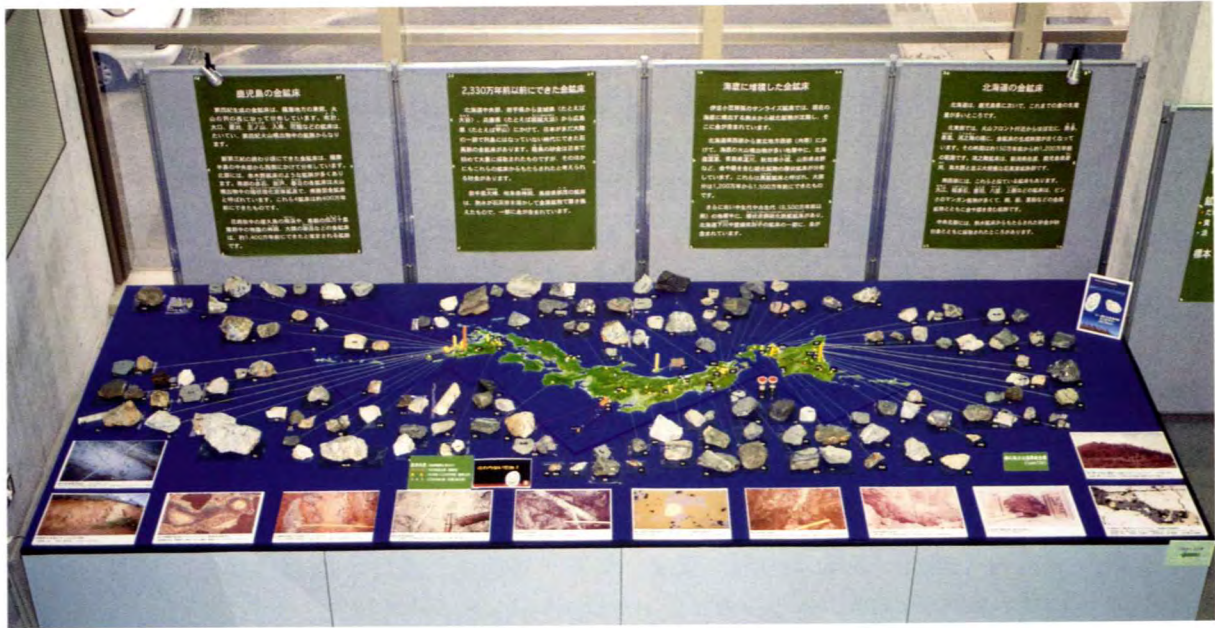
<金鉱石を探す、掘る、採り出す方法>

昔との対比：江戸時代の金山の様子（地図）：現在の採掘現場：鉱脈型と南薩型の鉱床の標本

<日本の金鉱石 平面5.5m×3m>

火山フロントを入れた日本地図（50万分の1）上に約100の鉱山の位置を掲示したもの：生
成時代ごとに色分けし（2000万年以前を紫、200万年以前を黄、200万年以降を赤）、金生産
量1トンをも1mmの柱で示したこと

<その他>



第2回特別展 日本の金鉱山と金鉱石

短冊に書かれた山上億良の歌、展示解説をしてもらったこと：金鉱石の見た目が美しくないこと：実物の金鉱石をしかもたくさん見れたこと：鹿児島県が金の産出が日本一であること：金の年生産量が菱刈：120トン、佐渡が80トンで、菱刈がずば抜けていること：鹿児島県だけに稼働中の金山が4ヶ所（菱刈、赤石、春日、岩戸）あるということ：日本のものが多いので身近に感じ、興味深かった

4、よかったものと悪かたつたものをあげてください。

<よかったもの>

小判：炭化物：輝水鉛鉱：薩摩切子：インゴット：球状珪化岩：植物入りの水晶：モリブデンの鉱物：ウィーン楽団コイン：貝化石イノセラムス：ロドクロサイトと石英が一緒になったもの：山ヶ野金山の古い写真：鉱山の探査に関する展示：日本の金鉱床の生成年代別の配列：菱刈、山ヶ野など鹿児島県の金山関係：銅が金のように見えていたこと：黄鉄鉱の自然結晶の見事な形：金の採掘作業の工程で採れる金の量が微量であること：金鉱の発見から金を製錬するまでの作業がパネルで紹介されていたこと：様々な標本が見比べられたこと：顕微鏡を用いて岩石中の金を見せてくれているところ：鉱石に触れられるコーナーがあること：体験コーナーでの磁石を使っての実体験：体験コーナーで講師の方が塩酸を使っての実験をされたこと：くわしい説明：通常、どうやっても見ることでできないような鉱石のサンプルをたくさん見ることができたこと

<わるかったもの>

ゴールドパークのスプーン：インゴットが鉛だったこと、できれば、さわって重さ、やわらかさを確かめてみたかった：順路がわかりづらかった：学外から来た人に、展示会場の場所が果たしてわかるのか？：触って良いものとダメなものとの区別がはっきりしていないこと：数多く鉱石が展示してあったが、同じ安山岩という名称でも、見た目全く違うものが展示してあった所。なぜ見た目が大きく違うのに、名は同じなのか？ 説明がほしかった

5、この展示を何でお知りになりましたか？

ニューズレター	35	(6%)
ポスター	114	(19%)
市電吊り広告	8	(1%)
新聞	18	(3%)
垂れ幕	57	(9%)
たて看板	50	(8%)
人にすすめられて	162	(27%)
その他	166	(27%)
回答数	610	

6、鹿児島大学総合研究博物館をご存じでしたか？

はい	380	(57%)
いいえ	276	(42%)
無回答	5	(1%)
回答数	661	

7、今後、どんな展示を見たいですか？（重複回答あり）

動物	143	(14%)
植物	122	(12%)
昆虫	96	(9.6%)
化石	224	(23%)
鉱物	84	(8.4%)
歴史	114	(11%)
考古	122	(12%)
鹿大の現在の研究	122	(12%)
回答数	1003	

<展示に関する要望など>

天文：農業：宝石：日本史：水産関係：熱帯の植物：鹿児島大学の歴史：火山に関するもの：鹿児島県の地下資源：鹿児島県特有の動植物：地元ゆかりの文学者展：電波望遠鏡でわかったこと：美術系（建築物、刀剣、焼物）：錦江湾の海の生き物について：海底生物、魚や海に関する展示、水生動物、魚類の研究：金魚（日本と中国）、金魚伝来500年を記念して：最先端といわれるもの：企業との共同作業：子どもたちが楽しめるもの：鹿児島という特徴的な環境を大きくアピールできるもの：総合的な配慮のある企画：鹿児島ならではの鉱物（石）：鹿児島で採れた珍しい石の標本（フィールドでの採取の仕方もわかると楽しそう）：地域単位に人文、社会、自然を網羅した展示：ビデオによる紹介：小・中学生にも分かり易い説明

8、その他気づいた点があれば、自由にお書きください。

<会場について>

- ：土、日曜日でも学内に車で入れれば、来場しやすいと思う
- ：仮設でいいので、常設展示を・・・

- ： 駐車場がなくて困りました
- ： 会場の入口がわかりませんでした
- ： 会場まで来るのに場所がわかりずらく、何度も道に迷いましたので、もう少しわかりやすくしてほしいです
- ： 車で来る学外者には場所がわかりにくいと思います

<展示形態、テーマ自体について>

- ： 各コーナーのタイトルがどーんと上や外に出ていたらわかりやすいかも
- ： 一つ一つの展示コーナーに対して、もう少し説明があると理解しやすいと思った
- ： 展示カタログを充実させてほしい。多くの人が期待している
- ： 鉱物や火山の展示はむずかしいと、さらに深く感じた
- ： スペースが少しせまかった気がする
- ： 少ないスペースをととても有効に使っていて、とても感心した
- ： 日本の金鉱石の産地を示した地図に対して、世界地図にも示してほしい
- ： 説明文にルビがふってあり、また文字が大きかったのでとてもみやすかった
- ： 展示に時間と手間をかけており、かたい鉱物に人のあたたかみがかくわり、なんともおだやかな気持ちにさせられた。とてつもない時間の流れに圧倒され、自分の存在や生きるということを考えてしまった。ここにいても、意識の広がりを覚え、ふと宮沢賢治のことを思い出した
- ： レイアウトがすばらしかった
- ： 触ることができる資料もあり、興味をもてた
- ： いろいろな鉱石をさわった
- ： 価値やとれる場所等を全体の鉱石で記してほしい
- ： 化学式などについての説明の添え書きがほしい
- ： かわいいキャラクターの絵が目をつけた

<展示全般について>

- ： 工学部で行っている日本機械学会の講演会の講演で、この催しを知った
- ： ニュースレターはとても見やすく、わかりやすかった
- ： どうにかこのおもしろさを世の中に広めたい
- ： 貴重な資料なので、各大学、研究機関等の協力をもらえば、もっと多くの人に知ってもらえるし、見てもらえるのでは
- ： 収集された標本の広域、多種に感動した
- ： 展示スタッフに解説してもらおう方がもちろんよいが、音声解説があるともっといいのではない
- ： 浦島先生に説明していただき、くわしく見聞きすることができよかった
- ： ていねいな説明をありがとうございます。地球からのめぐみをうけていることを実感した
- ： 県内やほかの博物館にも貸出したら良い。せっかくのパネルが惜しい
- ： この展示をどこかで常設していただけたらと思います
- ： 展示の広告を早くからされるとよいと思う
- ： 外で案内をもっとやれば、もっと多くの足と目が向けられそうでもったいない
- ： 収集力がすごいと思った。興味をもてたし、参考になった
- ： 身近で遠いものと思っていましたが、自然の偉大さと石の暖かさを感じた

- : ほとんど興味はなかったが、立ち寄ってみて大いにためになってよかった。金が我々の生活に密接につながっていることをあまり知らなかった
- : ほかの博物館では見慣れないものを説明していただいてありがとう
- : 鹿児島についてより理解を深められるような展示が今後さらに増えることを期待する
- : 薩摩切子に金が使っていることは知らなかった。鹿児島らしいと思った。たいへん勉強になった。
- : 青金がみたかった
- : すばらし展示品で、わかりやすく楽しかった。再度ゆっくりきます
- : 子供にもわかりやすそうでした。機会があれば親子で来たい
- : やさしい一口講座など設定していただければいいと思います
- : 鹿児島の金鉱脈に興味を持った
- : 自然金を初めて見れたのがうれしかった
- : 赤石鉱山産の自然金というとてもめずらしい物を見ることができ、とてもいい経験をするのができよかったです。また、顕微鏡でみないとわからないくらい微量にしか入っていないことを知り、驚いた
- : 鉱物をこれだけたくさん一度に見学したのは初めてでした。“百聞は一見”という感
- : 色々、初めて知ることが多く、とても勉強になった
- : 展示スタッフが情熱一杯で、私たち夫婦の初歩的な質問にもきちんと答えていただきうれしかった。博物館が完成したら又、見学させて下さい
- : 鹿児島で金がたくさんとれることを知っておどろいた
- : ビデオによる紹介や小学生にもわかり易い説明がほしかった
- : 石を採取するたのしさをあじわってみたいと思います

<その他>

- : 火山フロントのラインが島根沖で切れているが、日本海をへて北朝鮮の金剛山方面に伸びていると仮定して、金が産出しているとすれば、地球科学的には火山活動がかつてあった証拠でもあるから、かつての渤海の滅亡が白頭山の大噴火によるものとする説を裏付けることにもなると思った。だとすれば活断層的な地震活動がある月、予想もしない時に突然、神戸のように直下型大地震災が朝鮮北部で発生することもありうる
- : 菱刈鉱山の現代を象徴する先端的な採掘技術と永野、山ヶ野金山の採掘技術の構造（近代化遺産）の継承と断絶。天降川水系の特色（金山群と温泉群）について知りたい
- : 先日、東大の総合博物館の学位記展を見ましたが、大変おもしろかった

5. 第3回 生命科学学術講演会

2002年12月3日（火）14時から理学部220号講義室（郡元キャンパス）において「発酵と伝統食品」と題して第3回 生命科学学術講演会を、講師に河内源一郎商店（株）の山元正明 代表取締役を招いて、研究者、学生を対象に聴講無料にて開催した。

今回より同講演会は、鹿児島大学理学部生命化学科有機生化学講座と総合研究博物館の共催行事として行われ、同講師による理学部主催のインターシップ講演会にひきつづいて行われた。



山元 正明氏

本講演では、麴をはじめとする微生物発酵のメカニズムから味・香り・栄養にわたる発酵食品の魅力、現在の発酵食品製造技術、さらに製造業における学術的態度の大切さまでわかりやすい言葉で講演いただいた。

インターンシップ講演会にひきつづいて同会場で行われたこともあり、研究者とともに学生の参加が目立った（総勢80名）。研究者は理学部の生命化学、地球環境科学、農学部、工学部、教育学部などの所属であった。60分間の講演につづいて質疑応答（20分間）が予定時間を超えて活発に行われた。このような多分野が関係する学術講演会を今後も開催してほしいとの意見を理学部・農学部の両学部の研究者からいただいた。学生からは、わかりやすい講演会であり、この分野をより深く勉強してみたい、このように熱心に取り組める製造業の仕事に就きたいなどの感想が寄せられた。

6. ワークショップ

「エコツーリズム—生態資源からの視点—」

2003年3月10日、2002年度鹿児島大学総合研究博物館ワークショップ「エコツーリズム—生態資源からの視点—」を山田勇教授（京都大学東南アジア研究センター）を招いて開催した。

鹿児島大学総合研究博物館では地域貢献事業として、「鹿児島フィールドミュージアム」の構想を進めているため、その内容と関連性の深いエコツーリズムについて議論すべく企画されたのがこのワークショップであった。

講師の山田氏は、インドネシアを中心に、東南アジア大陸部、南米、中国、北欧など世界各地の森林でフィールドワークを展開してきた森林生態学者である。氏は各地で見聞きした経験をもとに、自然環境とそこにすむ動植物や微生物、そして人間の活動のすべてを包括的にとらえ、その全体が地域における「生態資源」であるとの視点に立ってユニークな環境論を展開している。今回のワークショップでも、さまざまな自然環境に成立した森林やそこに暮らす人々の美しいスライドが提示され、生態資源がこれまで地域の生物多様性、伝統文化や社会とどのようにかかわってきたのかをわかりやすく解説された。さらに、山田教授は生態資源の将来的な保全を図るうえでエコツーリズムが果たす役割、ガイドやボランティアのありかたなどについて積極的な提言をおこなった。



山田 勇氏



ワークショップ会場

今回のワークショップは月曜日の午後という時間帯の開催であったにもかかわらず、学内の教官や学生ならびに一般からおおよそ50名もの参加者が集まった。また、質疑応答の時間には、エコツーリズムの本質を理解しようとする人々、あるいはエコツーリズムの実践の場にいる人々からの質問やコメントがあいついで出された。ワークショップ終了後、山田教授は、日本におけるエコツーリズムの先進地、屋久島などをかかえる鹿児島ならではの積極的な参加や発

言が多く、たいへん刺激されたと感想を述べていた。このようなワークショップは今回が初めてのころみであったが、今後学内、学外を問わず多くの参加者が関心を寄せ、自由に議論しあえるような場に育てて生きたいと考えている。

7. その他の活動

(1) 植物標本室

2002年度、植物標本室とその収蔵標本に関連して行われたおもな活動は、以下のとおりである。

① オフィスアワーの設定

植物標本室に博物館スタッフが常駐するオフィスアワーの時間を、毎週火、水、木曜日の午後2時から4時に設定し、実施した。

② 整理補修作業

空いた容器を使って標本の置き場所を整理しなおしたのち、福元、ボランティアの岩井雄次さん、小田原祥子さんが参加して標本の補修と汚れおとしの作業を行った。1年間でおよそ全体の10分の1程度の標本に対して、作業が完了した。

③ 利用者への公開

1年間でのべ100人程度の植物標本室利用者があった。そのなかには県内のみならず、九州大学、大阪市立大学、大阪市立自然史博物館、信州大学、東京大学、東北大学など県外からの研究者も多数含まれており、収蔵標本が多方面の研究に役立てられていることがわかる。

④ コケ標本の受け入れ

理学部地球環境科学科教授 鈴木英治氏からの申し出により、故 新 敏夫先生が収集したコケ標本323点（蘚類300点、苔類8点、その他15点）を受け入れ、植物標本室内に保管した。

⑤ 名誉教授 初島住彦氏の文献収集

初島住彦氏が執筆した文献が系統的に収集された。そのファイルは植物標本室内で自由に閲覧でき、利用者からの好評を得ている。

⑥ Index Herbariorumへの登録

世界のハーバリウム連合体であるIndex Herbariorumに対し、鹿児島大学総合研究博物館植物標本室の連絡先、担当者などの情報の再登録をおこない、コードをKAGに統一した。



植物標本室



植物標本室 作業風景

⑦ハーバリウム見学

落合は、京都大学総合研究博物館、大阪市立自然史博物館、ボゴール植物園(インドネシア)、林業研究所(ミャンマー)、クイーンシリキット植物園、チェンマイ大学理学部(タイ)の各ハーバリウムを見学し、標本の保管や運営の方法などについて担当者と情報を交換した。

(2) ミニコンサート「金の音色・銀の音色」

第2回特別展「地球からのめぐみ—金—」の一環として、ミニコンサートを11月16日(土)、13時より14時までの1時間、市民講座に先立って鹿児島大学総合教育研究棟エントランスホールで開催した。大学祭期間中であったこともあり、準備した60脚の椅子の倍近くの120名前後の聴衆が集まった。

演奏者はフルーティストの池田博幸氏、新名主かおり氏、和田梨奈氏、チェリストの有村航平氏の4名で、バロック音楽から現代音楽、さらにはスクリーンミュージックと変化に富んだ演奏が行われた。

演奏に先立って池田博幸氏による金、銀、頭部のみ銀の3種類のフルートの吹き比べがあり、その音色の違いに会場から思わずどよめきがあがった。1時間の演奏時間が短いとの意見も聞かれた。



池田 博幸氏



新名主 かおり・和田 梨奈・有村 航平氏



コンサート会場

(3) 高倉復元完成式典

工学部教授 土田充義氏を中心とする工学部建築学科有志によって鹿児島大学郡元キャンパス農学部門北側に奄美の高倉が建てられた。この高倉は明治16（1883）年に大島郡大和村恩勝に建てられ、昭和34（1959）年に鹿児島県立博物館に寄贈されたものである。ところが平成13（2001）年4月に不慮の火災に見舞われ損傷を受けた。これを土田氏が引き取り、復元に至ったものである。

2002年12月12日、「高倉完成式典」が復元された高倉の前で執り行われた。学長・館長の挨拶とともに、復元にあつて多大な支援を受けた知覧町茅葺技術保存会（会長 上野秋徳氏）に対して学長より感謝状の贈呈が行われた。



高倉復元完成式典



土田 充義氏

(4) 生涯学習県民フェア

2003年2月4日（土）10：00～15：00より、大口文化会館（大口市）において鹿児島生涯学習県民フェアに広報活動の一環で総合研究博物館より専任教官1名、博物館ボランティア1名で参加した。大学関係は、当館以外で5校（いずれも私立大学）、博物館関係では数館、他は青少年自然の家など市町村の教育機関、その他の教育関係任意団体がブースを出展した。この行事には2000名の参加（主催者の鹿児島県教育委員会発表）があった。

総合研究博物館の学術標本として化石6点、戦前の理化学機器4点からなるミニ展示、公開講座、市民講座をはじめとする各講座やボランティア活動、博物館業務紹介などのパネル展示ならびにその説明を行うとともに博物館のパンフレット（1100枚）を配布した。

主な参加者は鹿児島県の各市町村の教育委員会、学校関係者、公民館役員、生涯学習講座担当者、生涯学習受講者、ならびに一般（大口市やその周辺の北薩地域が多い）であった。総合研究博物館は初参加ということもあつて、会場入り口正面の最も目立つ位置にブースを指定していただいた。このこともあつて、過半数を超える参加者に博物館パンフレットを配布することができた。

参加者からは、鹿児島大学に博物館があることは知らなかった、博物館主催の公開講座・市民講座の案内を送付してほしい、もっと存在をPRしてほしいなどの要望が寄せられた。ミニ展示に関しては、鹿児島の各地でこのような出前展示を企画してほしい、町の施設を提供したいのでぜひ来てほしい、早く展示施設をつくってほしいなどの要望をいただいた。この行事には鹿児島大学の部局のなかで総合研究博物館のみが参加した。鹿児島県教育委員会の担当者より、今後も総合研究博物館には参加してもらいたい、生涯学習全般にわたり総合研究博物館の協力を頂きたいとの要請があった。当館へのさまざまな要請は、鹿児島大学が地域に根ざした活動を十分果たしてこなかったことの反映と考え、地域貢献を地道に果たしていく使命を痛感した。

8. パンフレットの作成

2002年12月、総合研究博物館の業務を紹介するパンフレット(3000枚)を作るようになった。

パンフレットは携帯や郵送に適したA4、3つ折りでデザインした。総合研究博物館の4つの主要な業務として、(1) 標本の収集・受け入れ、(2) 整理・保管・データベース化、(3) 標本を通じた教育研究、(4) 展示公開、をあげ、これらが明確に伝わるように写真を多用し見開き全体に配置した。裏面には地域貢献に関する業務のうち、特に学外に向けた学習の場として市民講座・公開講座、ボランティア活動、フィールドミュージアムなどの活動を紹介した。さらに総合研究博物館のアクセスマップと交通案内、住所、電話、FAX、ホームページアドレスなどを示した。

パンフレットは鹿児島大学学長を含め全教官ならびに各部局の係長以上の事務官に学内便で配布する(1300枚)とともに、2003年2月4日に鹿児島県大口市で開催された鹿児島生涯学習県民フェアにおいて広報活動の一環で1100枚を配布した。また、高倉復元完成式典以降の総合研究博物館の各種行事の際に参加者に配布した。

9. ボランティア活動

昨年ひきつづき、博物館業務のうち人員を要するものについて作業を円滑に進める目的で、ボランティアの募集を行った。昨年より活動を継続していただいた方も含めて総勢21名が参加した。

(1) 第2回特別展の種々の業務を補助していただいた。



ボランティア 展示準備作業

6月、学生ボランティアの協力で金鉾石標本の運搬・整理ならびに展示標本準備作業を開始。

8月末、特別展展示パネル、展示物、展示標本リストに合わせてキャプションなどの製作開始。特に500枚を超えるキャプション作りは多くのボランティアの協力が必要であった。

9月中旬、展示ポスター、リーフレットの配布援助。

10月、特別展展示案内物作成、10月20日より搬入、会場の準備、設営、清掃、同月24日より特別展案内(11月26日まで)に協力(会場における誘導・監視の係に約20名)。会場係は1時間30分を1単位として学生がボランティアに参加しやすいように時限を単位に交代制として行った。学外協力研究者の浦島幸世氏(この案内役もボランティア)や博物館専任教官が専ら案内役を務めたこともあり、会場係はもっぱらパンフレット配布・誘導・監視・アンケートへの協力依頼に徹することができた。

11月27日、28日、搬出、清掃、会場の現状復帰に協力。

(2) 学内より見いだされた教育・研究機材、研究ノート類、プレパラート標本について、博物館資料として整理と登録準備作業をボランティアの協力を得て進めている。ボランティア諸氏と専任教官の地道な作業の協力の結果、鹿児島高等農林学校時代の研究ノートの一部に、現存するプレパラート標本と照合できるものがあることが判明するなど、はやくも成果が現れつつある。

2002年度において機器類について16件で350点余り、学術標本も合わせると42件で8万点あまりの学内外の学術標本をボランティアの力を得て整理することができている。

(3) 昨年にひきつづきボランティア（一般3名）により構内遺跡から出土した土器の接合、番号付け作業を継続。

(4) 植物さく葉標本の整理・修復作業をボランティア（一般2名）により開始。

7 総合研究博物館に所蔵された標本類

はじめに 2001年4月の総合研究博物館創設以来、各部局において保管されてきた学術標本のうち、管理教官の停年退官や異動により行き場を失った標本資料の受け入れ、管理者がおらずに廃棄される物品などのうち貴重なものは総合研究博物館へ移管を行ってきた。

それ以外の学術標本については2002年12月より総合研究博物館の収蔵庫が完備されるまでの当面の間、各部局で責任で保管することが全学的に取り決められた。ここでは、2002年4月から2003年3月までの間に総合研究博物館に収蔵された学術標本資料のうち、主要なものをとりあげ、管理状況等を中心に報告する。

金鉱石を中心とする鉱石標本 浦島幸世 鹿児島大学名誉教授(学外協力研究者)から北海道大学、鹿児島大学在職中に採集した金鉱石を中心とする鉱石標本14000点の寄贈があった。しかし、そのほとんどは住友金属(株)菱刈鉱山の好意で、同鉱山に保管されている。そのため、鉱山の倉庫から博物館への運搬が必要である。鉱石標本は重い物が多く、今年度は第2回特別展に展示予定の標本のみを運搬した。来年度に残りを運搬し、浦島氏の協力を得て標本の整理、データベース化を行う予定である。

「岩石・鉱物・化石標本」元 日鉄鉱コンサルタントの崎元雄厚氏から約100点にのぼる、世界中から採集した岩石、鉱物、化石標本の寄贈があった。これらの標本は上記の鉱石標本とともに、来年度に整理し登録作業する予定である。

奄美の高倉 土田充義 工学部教授を中心とする工学部建築学科有志（高倉研）が、鹿児島大学構内農学部門近くに修復・再建した奄美の高倉が総合研究博物館に移管された。

この高倉は、明治16（1883）年、奄美大島の鹿児島県大島郡大和村恩勝に創建され、昭和34（1959）年に鹿児島県立博物館に寄贈されたものである。高倉としては現存最古の建築物



高倉復元作業

であり、建築学的・民俗学的にきわめて重要な資料である。鹿児島県立博物館では長年、屋外展示として活用していたが、平成13（2000）年4月9日に不慮の火災に見舞われた。それを、土田氏が中心となって修復作業を行い、再建したものである。また、再建にあたっては、知覧町教育委員会・知覧町茅葺技術保存会の支援を得た。総合研究博物館は高倉前に看板を設置し、その意義を解説するとともに、今後の管理を担うことになった。

建築史資料 土田充義 工学部教授より、年度末の退職に先だって、在職中に集積された建築学関連資料の寄贈を受けた。その資料は段ボール箱に詰められた図面・写真・メモ・ファイル類と図面筒ケースに入れられた図面類の2形態ある。前者は13箱、後者は12本ある。

資料は鹿児島県内および宮崎・福岡などの歴史的建造物の調査に関するものを中心とし、さまざまな調査保存委員会等の関連資料も含まれている。いずれの箱・図面筒ともにぎっしりと資料が詰め込まれた状態であり、またリスト等も存在しない。そのため、現状ではなにか収納されているのかは厳密には確認できない。今後は梱包単位ごとに順次開封し、その資料内容を確認した上で、登録作業を行い、そのデータを公表し、資料活用を図る必要がある。

以下に、梱包単位ごとに付された資料タイトルを列記しておく。

図面・写真・メモ・ファイル類（整理用段ボール箱入り）

- ・鹿児島県近世社寺
- ・鹿児島県近世社寺 離島編
- ・石橋資料
- ・飫肥の武家住居 酒津の町屋
- ・川辺町磨崖仏資料
- ・鹿児島県離島の民家
- ・麓No.1 大口・蒲生・穆佐の武家屋敷
- ・麓No.2 出水麓 蒲生御仮屋門
- ・麓No.3 出水麓 高城麓
- ・麓No.4 出水麓
- ・麓No.5 知覧麓
- ・麓No.6 志布志麓・入来麓・離島の高倉（写真）
- ・旧福岡県庁舎図面

図面（図面筒ケース入り）

- ・入来麓
- ・志布志麓
- ・知覧麓
- ・高岡・大口・蒲生の武家屋敷
- ・知覧佐多直忠氏住宅
- ・蒲生御仮屋門
- ・考古資料館
- ・鶴尾橋図面 日南飫肥伊藤・小村
- ・鶴尾橋・太鼓橋
- ・武ノ橋
- ・西田橋
- ・新上橋

理学部物理科学教室機器 理学部物理科学教室から寄贈された機器については昨年度の年報に紹介した。鹿児島大学理学部の改修は、一部を除き2002年3月中に終了した。しかし、改修後の理学部建物の各研究スペースは改修前よりも狭くなったため、置き場に困りやむなく廃棄される機器・資料が増加し、物品の引き取りに関する博物館への問い合わせは2002年4月以降もつづいた。なかでも今回の改修の中心であった物理科学科からは多くの機器が廃棄やむなしの状況に陥った。第七高等学校時代以降の電磁気学や天文学の実習用機器、戦前、戦後の電気・電子機器の一部はかろうじて総合研究博物館に引き取ることで難を免れた。これら機器標本の情報を収集した結果、このうちの数点は各地の博物館に収蔵・展示されているものと同型であることが判明した。データベースの作成準備とともに、公開展示にむけた作業を進めている。

理学部地球環境科学教室（旧化学教室）機器 理学部の改修に伴い化学天秤の寄贈を受けた。地球環境科学教室の実験準備室（以前は化学科無機・分析化学・物理化学学生実験準備室）に、化学天秤14台が保管されていた。最古のものは大正から昭和初期のものと考えられるが、保存状態がよくほとんど腐食がみられない。それらの化学天秤は本体のラベルや記載から、1943年に開校した医学部の前身である県立鹿児島医学専門学校、県立鹿児島医科大学、県立鹿児島大学（医学部と工学部からなる）のいずれかの時期に購入されたことが認められる。鹿児島大学50年史には、1955年1月、県立鹿児島大学では工学部が医学進学課程の学生の教養教育も担当し、これがのちの国立鹿児島大学一般教養部となっていることから、化学天秤はこれらの機関・部局を転々とし、理学部化学科の改組に伴い最後は地球環境科学教室へ落ち着いたと考えられる。

農学部園芸学教室、害虫学教室資料 2002年6月、農学部生物生産学科教授 岩井純夫氏より、園芸学教室時代の教官の小倉弘司氏のアブラナ科雄性不稔発見に関するノート（23冊）、卒業論文、研究報告、鹿児島大学農学部害虫学教室時代の顕微鏡（一部は高等農林学校当時のもの）が総合研究博物館へ寄贈された。上記のノートにしるされた発見は、この分野では重要なものとされており、小倉弘司氏の発見の経緯を知る上で貴重な資料となりうる。

農学部動物学教室機器・資料 2002年8月、農学部生物生産学科助手 坂巻祥孝氏より、鹿児島大学農学部の前身、鹿児島高等農林学校（1908-1944）時代を中心とする、さまざまな実験器具、当時の研究ノートや得業（卒業）論文、プレパラート標本が寄贈された。研究室として長く受け継いで保管してきた資料が、近々始まると予想される農学部建物改修時にこれらの貴重な機器が紛れないようにとのことで、総合研究博物館に寄贈された。内容は、鹿児島高等農林学校開校当時の教授 岡島銀次氏が農学科動物学教室で教育研究に使用した器具（23点）、当時の教官や学生により作成されたプレパラート（約3000枚）や執筆された文献（304点）である。

農学部養蚕繊維関係資料 2002年11月、農学部生物資源化学科食品機能化学講座教授 藤井信氏の連絡で同講座保管棚より、多数の資料が見つかった。サンプル管に詰められたカイコの繭や綿、あるいは糸やロープなどの養蚕繊維関係資料である。なかには「鹿児島高等農林学校」のラベルを貼った美しいガラス瓶も認められた。総合研究博物館では、藤井氏よりこの資料の寄贈を受けた。

水産学部魚類標本 2003年1月、水産学部教授 小澤貴和氏より、論文の投稿に合わせて、論文登録標本の寄託（標本数76点）があった。ただちに標本に対して博物館登録番号を与え、本

博物館で登録、保管することとなった。

教育学部レコード資料 2003年3月教育学部学校教育教室教授 藤田正嗣氏より、氏が収集された戦前の流行歌等のSPレコード120枚が総合研究博物館へ寄贈された。なかには東条英機や乃木希典の肉声とされる訓話を録音したものもある。

理学部（教養部）コケ類標本 2003年3月、理学部地球環境科学科教授 鈴木英治氏より、旧鹿児島大学教養部教授 新敏夫氏の収集したコケ類標本24科66属323枚の標本を総合研究博物館に寄贈いただいた。

8 地球科学分野を中心とする学術標本の登録と管理

当館所蔵の地球科学分野を中心とした学術標本の整理・登録・保管等の業務について説明する。当館ではこれまでに、1) 標本登録番号の考案、2) 日本語及び英語によるデータフォーマットの作成、3) 標本の整理・登録作業 並びに4) コンピュータへのデータ入力作業を進め、学術標本のデータベース化を推進してきた(以上の詳細は、年報 No.1に記述)。

今年度(2002年度)は、以下の整理・登録作業を行い、それらのコンピュータへのデータ入力を完了した。

- 1) 日本の鉱石標本(3,457点)
- 2) 鹿児島大学理学部物理学科の理科機器資料(200点)
- 3) 鹿児島高等農林学校時代を中心に作成された文献資料(308点)

2)と3)については、それぞれNews Letter, No.4とNo.7で紹介しているので、本稿では1)の鉱石標本に関する概要を述べるとともに、学術標本の管理状況並びにデータベースの公開について記述する。

鉱石標本について 鉱石標本は、当博物館の学外協力研究者 浦島幸世氏が長年に渡って収集されてきたもので、日本を中心に世界各地の様々な鉱石(約14,000点)を含んでいる。また、それらの多くは、既に閉鎖されている日本各地の鉱山から採集されたもので、現在では入手することの出来ない稀少価値の高い標本である。

現在、当館では浦島氏とともにこれらの鉱石標本の整理及び登録作業を行っている。また、1) 登録番号、2) 前登録番号、3) 収納箱番号、4) 収蔵場所、5) 岩石・鉱物名、6) 鉱石名、7) 産出地、8) 鉱山名、9) 採集者、10) 採集日、11) 入力者、12) 入力日等の標本データのコンピュータ入力も進めている。

これらの標本の一部は、第2回特別展「地球からのめぐみ-金-」において公開した。また、2003年には、鹿児島県立図書館、鹿児島県知覧町のミュージアム知覧において、それらの企画展が予定されている。

標本の管理状況について整理・登録およびデータ入力の完了した鉱石標本は、現在、鹿児島大学内で保管している。また、現生動物の液浸標本、理科機器資料、文献資料等は総合研究博物館内に収蔵している。

しかしながら、学内の現在の収蔵スペースは年間を通して湿度が高く、カビが生じるなど標本の保存状態を悪化する危険性が高い。また、棚が設置されていないため、標本箱は山積みになれ

ており、標本を容易に取り出すことの出来ない状態となっている。

このような状況を改善するため、出来る限り早急に、温湿条件、棚等が整備され、スペースに余裕のある収蔵庫での保管が望まれる。また、標本を常に良好な状態で管理し、展示や研究など必要に応じていつでもそれらを円滑に出し入れすることの出来る常勤のキュレーターの雇用も必要である。標本保有者が博物館に安心して標本を寄贈できる体制を整える上でも、標本の管理には十分に配慮することが肝要である。

当館ではこれまでに、1) 日本全国の鉱石標本 (3,457点)、2) 宮崎及び種子島産の貝類化石標本 (1,821点)、3) 島原湾産の有孔虫化石標本 (365点)、4) 文献資料 (308点)、5) 理科機器資料 (200点) の入力作業を行い、標本データベースの一般公開に向けて準備を進めている。

標本データベースのインターネット公開、標本目録の刊行等を推進することは、1) 国内外の研究者がスムーズに標本を検索・利用できる体制、2) 標本を展示・教育普及活動に活用できる体制を整備する上で必要不可欠な作業である。

今後は、標本の整理・登録作業のマニュアル化を進め、ボランティアやアルバイトの方々の協力を得ながら、標本データベースの構築及び公開に向けて尽力すべきである。

9 博物館見学記

1) 博物館調査活動

視察先：大阪大学総合学術博物館 (2003年1月23日)

目的：博物館活動および視察

調査員：内木場哲也・福元しげ子

内容：肥塚 隆館長・豊田二郎助教授・米田該助助教授・上田貴洋助教授・大橋哲郎助手に会い以下の点について意見をうかがった。

大阪大学総合学術博物館の発足にいたるまでの経過をうかがい、人員構成運営経費・広報活動、人的組織、支援状況について情報交換を行った。

鹿児島大学総合研究博物館の各種学術標本のデータベース化の状況についての質問があった。始動してまもない状況のもと、実際の入力作業は研究支援推進員とボランティアであることなどを説明した。阪大には自然史系の研究分野がない(共通教育に地学があるのみ)が、京大の熱帯植物に対して阪大は薬用植物園があるというようなお互いの特色をいかしての役割分担が可能である。

ほか、大阪大学総合学術博物館の貴重資料や展示中の化石標本・マチカネワニ(*Toyotamaphimeia machikaniensis*)について説明を受けた。



大阪大学総合学術博物館

2) 博物館視察

視察先：島津創業資料館（2003年1月24日）

目 的：鹿児島大学総合研究博物館にて登録作業中の理科学機器に関する情報収集および視察。

調査員：内木場哲也・福元しげ子

内 容：鹿児島大学総合研究博物館にて登録作業中の理科学機器（島津製作所製）検流計、磁束計について詳細を知るべく、数十年前にさかのぼって生産

された製品の目録リストの閲覧した。限られたスペースながら、製品および出版物等の展示が建物を活かした展示標本点数の多さには目をみはるものがあり、大いに参考となった。



島津創業資料館

視察先：滋賀県立琵琶湖博物館（2003年1月24日）

目 的：博物館新設のための展示の調査および視察

調査員：内木場哲也・福元しげ子

内 容：オープン後、入館者を継続的に確保（集客動員数確保）されている博物館の展示施設、展示内容、展示会場の解説スタッフの仕事の様子等を視察した。すばらしい立地条件のもと、市街地から離れていても入館者が確保でき、なおかつリピーターがふえていくとのことである。博物館の展示もさることながら、どのような広報活動をくりひろげれば集客動員数の確保へとつながるのか、近い将来のわれら鹿児島大学総合研究博物館の課題といえよう。

鹿児島大学総合研究博物館年報
Annual Report of The Kagoshima University Museum
No.2
2002

鹿児島大学総合研究博物館 The Kagoshima University Museum
890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 1-21-30, Kohrimoto, Kagoshima 890-0065, Japan
Printed in Japan
2004.3.30

鹿児島大学総合研究博物館

第2回特別展

地球からのめぐみ - 金 -



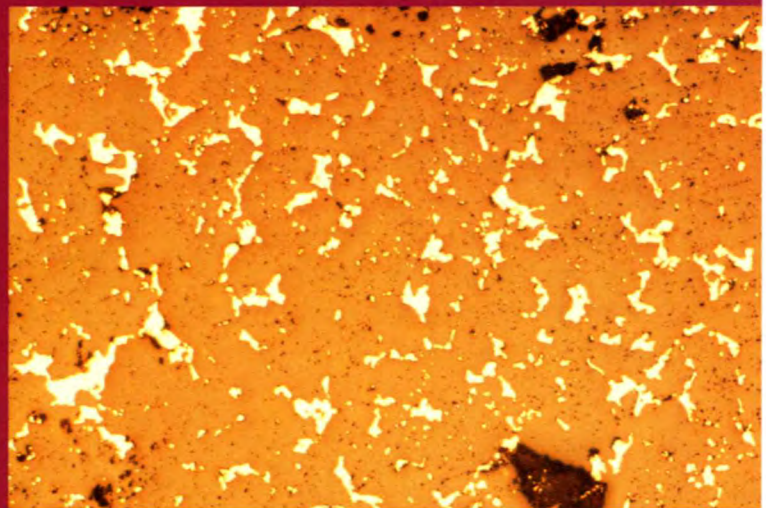
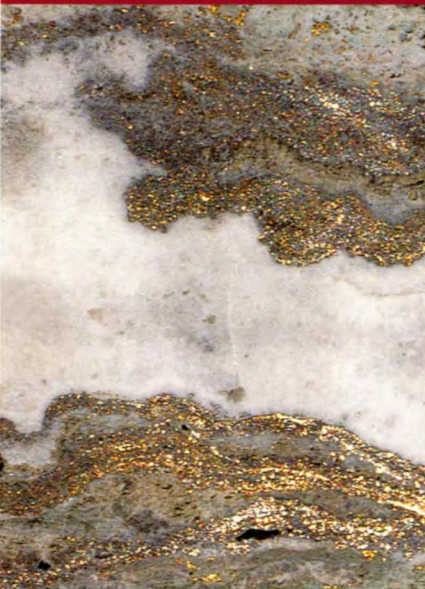
期間◆2002年10月24日(木)～11月26日(火) 期間中全日開催

場所◆鹿児島大学郡元キャンパス

総合教育研究棟 2F プレゼンテーションホール

開館時間◆9:30～17:30

◆入場無料◆



市民講座 表題◆地球からのめぐみ - 金 -

講師◆浦島幸世 鹿児島大学名誉教授

日時◆11月16日(土)14:00～16:00

場所◆鹿児島大学郡元キャンパス総合教育研究棟2F201

問合せ先／鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 TEL/FAX 099-285-8141
後援／鹿児島県立博物館・住友金属鉱山(株)菱刈鉱山・(株)島津興業尚古集成館・ゴールドパーク串木野

第2回特別展 地球からのめぐみ - 金 -

2002年10月24日(木)～11月26日(火)

みなさんは、金ということばかりから何をイメージされますか。ツタンカーメンの黄金のマスク、それとも身近な装身具、たとえば金の指輪、ネックレスやイヤリングでしょうか。

金はさびることのない安定した金属で、いつまでも輝きを失わないことから、ひとびとのあこがれの的でした。インカ帝国の金細工に代表されるように、いにしえから金は権力の象徴でもあったようです。

金は美しいだけでなく、役に立つ素材ともなります。フルート奏者にとって、金のフルートは柔らかく美しい音色を出してくれます。また、最近のハイテクにも金が欠かせません。宇宙を飛ぶ人工衛星は金の衣をまとい、太陽光線の熱からハイテク機器を守っていますし、コンピュータや携帯電話に使われているチップには金線が使用されています。

しかし、地球の内部にあった金が地表近くに濃縮するメカニズムや、人々がそれをどのように取り出すのかについてはあまり知られていません。

私たちが住む鹿児島県は、日本一の金の産出量を誇っています。1981年に、北薩の菱刈町から金を多く含む高品位の鉱脈が見つかりました。それ以来、多くの鉱山にかかわる研究者や技術者が鹿児島を訪れ、金に関する研究が行われてきました。

このような背景のもと、鹿児島大学総合研究博物館では、浦島幸世 鹿児島大学名誉教授に全面的なご協力をいただき、第2回特別展「地球からのめぐみ-金-」を開催する運びとなりました。浦島幸世先生は鉱床学の第一人者で、北海道大学理学部および鹿児島大学教養部において、金、銀、銅などの金属鉱床元素について研究を重ねてこられました。

本特別展では、日本の金鉱山、鹿児島の金鉱山にスポットをあて、これらの鉱山から産出した金鉱石の展示、金鉱脈のできかた、金鉱石採掘の方法と歴史、金の用途などについてわかりやすく解説します。なかでも、浦島幸世先生が国内外の金鉱山で調査研究を行った際にサンプリングされた金鉱石標本は、ぜひご注目いただきたい貴重なものです。

この展示を通じ、鹿児島県とかわりの深い金について、さまざまな角度からご理解いただけることと存じます。みなさまお誘い合わせの上、本特別展にぜひお越しください。



住友金属鉱山(株)菱刈鉱山産金鉱石

山田鉱から採掘された金鉱脈で、左側の金鉱石の大きさは、ほぼ2m、奥行1m、高さ1.4m、重量は約4トン。鉱脈そのものの標本としては日本で最大級。



交通案内

■ バス

市バス「法文学部前」下車徒歩3分、「騎射場」下車徒歩10分
鹿児島交通 バス「騎射場」下車徒歩10分

■ 市電

「工学部前」下車徒歩8分

■ JR

鹿児島本線「西鹿児島駅」下車、バス・電車で15分
指宿枕崎線「郡元駅」下車徒歩12分

■ 自動車

九州自動車道(鹿児島IC)より15分。車の入構は、農学部門、図書館前門をご利用ください。土・日・祝日はキャンパス内の駐車場は利用できません。ただし大学祭期間中の11月16日・17日は利用できます。

鹿児島大学総合研究博物館 鹿児島市郡元1-21-30 TEL/FAX(099)285-8141